蜜柑

芥川龍之介

　或(ある)曇った冬の日暮である。私(わたくし)は横須賀(よこすか)発上り二等客車の隅(すみ)に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗(のぞ)くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯(ただ)、檻(おり)に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠(ほ)え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠(けんたい)とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套(がいとう)のポッケットへじっと両手をつっこんだまま、そ

こにはいっている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかった。

　が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛(くつろ)ぎを感じながら、後(うしろ)の窓枠(まどわく)へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄(ひよりげた)の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵(ののし)る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌(あわただ)しく中へはいって来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐(おもむろ)に汽車は動き出した。一本

ずつ眼をくぎって行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽――そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙（ばいえん）の中に、未練がましく後（うしろ）へ倒れて行った。私は漸（ようや）くほっとした心もちになって、巻煙草（まきたばこ）に火をつけながら、始めて懶（ものう）い睚（まぶた）をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥（べつ）した。

それは油気のない髪をひっつめの銀杏返（いちょうがえ）しに結って、横なでの痕（あと）のある皸（ひび）だらけの両頬（ほお）を気持の悪い程赤く火照（ほて）らせた、如何（いか）にも田舎者（いなかもの）らしい娘だった。しかも垢（あか）じみた萌黄色（もえぎいろ）の毛糸の襟巻（えりまき）がだらりと垂れ下った膝（ひざ）

の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なのもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁(わきま)えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあって、今度はポッケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変って、刷(すり)の悪い何欄かの活字が意外な位鮮(あざやか)に私の眼の前へ

浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道（トンネル）の最初のそれへはいったのである。

　しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱（ゆううつ）を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、瀆職（とくしょく）事件、死亡広告――私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠（さくばく）とした記事から記事へ殆（ほとん）ど機械的に眼を通した。が、その間も勿論（もちろん）あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持（おももち）で、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられな

かった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋（うずま）っている夕刊と、――これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなって、読みかけた夕刊を抛（ほう）り出すと、又窓枠に頭を靠（もた）せながら、死んだように眼をつぶって、うつらうつらし始めた。

　それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅（おびやか）されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時（いつ）の間（ま）にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻（しきり）に窓を開けようとしている。が、重い

硝子（ガラス）戸は中々思うようにあがらないらしい。あの皸（ひび）だらけの頬は愈々（いよいよ）赤くなって、時々鼻洟（はな）をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しょに、せわしなく耳へはいって来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹（ひ）くに足るものには相違なかった。しかし汽車が今将（まさ）に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明（あかる）い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点（がてん）の行く事であった。にも関（かかわ）らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、――その理由が私には呑（の）みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとし

か考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、

殆息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷り

ぬけて、枯草の山と山との間に挟(はさ)まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すぼらしい藁屋根(わらやね)や瓦屋根(かわら)がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旒(いちりゅう)のうす白い旗が懶(ものう)げに暮色を揺(ゆす)っていた。やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索(しょうさく)とした踏切りの柵(さく)の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃(そろ)って背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを

仰ぎ見ながら、一斉に手を挙(あ)げるが早いか、いたいけな喉(のど)を高く反(そ)らせて、何とも意味の分らない喊声(かんせい)を一生懸命に迸(ほとばし)らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢(いきおい)よく左右に振ったと思うと、忽(たちま)ち心を躍(おど)らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑が凡(およ)そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑(の)んだ。そうして刹那(せつな)に一切(いっさい)を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴(おもむ)こうとしている小娘は、その懐(ふところ)に蔵していた幾顆(いくか)の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで

見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

　暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落（らんらく）する鮮（あざやか）な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬（またた）く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はっきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗（ほがらか）な心もちが湧（わ）き上って来るのを意識した。私は昂然（こうぜん）と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変皺（あいかわらずひび）だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包み

を抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……

………私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出来たのである。

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
　　１９６８（昭和43）年11月15日発行
　　１９８８（平成元）年５月30日46刷
入力：蒋龍
校正：noriko saito
２００５年1月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。